

なかった。

絶対認めたくない、こんなの。

絶対に。

「違うのか～～。そうなのか～～♡上のお口はそう言ってますけど、どうですかね～～？♡下のお口さん～？♡♡」

中継先に呼びかけるスタジオのアナウンサーのように問いかけられ、

「おッ…！？♡」

ぬちゅう…っ♡とやわらかくなった孔を熱いものにこじ開けられる。

「おッ…♡お…っ♡♡おお……っ♡」

玩具でふわとろに仕上げられた孔をぬる♡ぬる♡と開^あけ^あ拵^あげ、それが侵入してくる。

ビキッ！♡と音がしそうなほどの、筋肉の塊^{かたまり}のような猛々^{たけだけ}しいオジサンおちんぽ。その全様を、敏感にされた孔の内壁で把握させられる。

「お…おつき……い……♡♡、」

ゆるんだ口の端からよだれが^{した}滴るのもわからぬまま、気づけばそんなことを口走る。

男のおちんぽを奥まで咥えこまされ、その形を鮮明にわからされると同時に、少年の頭はもやがかかったようにとろけ、全てがあいまいになっていた。

「挿入^{いれ}られただけできゅうきゅう締まってとってもえっちおマンコだねえ〜？♡♡」

言いながら、つながったままの腰をゆったりと揺さぶられる。

軽く動かされているだけなのに、もう白目を剥きそうなほど気持ちいい。

中年オジサンの極太屈強おちんぽがなかの水分ですべるたび、おもいきり腰を振り立てててしまいたくなる。

それでもこんな大勢の前でこれ以上恥ずかしいところを見せまいと、少年はけなしの理性で歯を食いしばる。

「これが初えっち体験なんて、ウソウソ〜♡絶対ウソ〜♡絶対ダンスの練習のとき、えっちの腰振りも一緒に練習してたでござるよなあ〜？♡」

「し、てな…、お”ッ！？♡♡」

少年と繋がったまま、男は腰を波打たせるように動かしはじめる。

「おっ♡♡お…♡あ…！！♡だ…っらめ…ッ！♡これだめえ…！！♡」

バキバキおちんぼの硬い筋肉のような隆起に、ぷっくり前立腺をこりゅッ♡こりゅ
うッ♡♡と擦り潰され、生理的な涙があふれる。

はげ
烈しく動かれているわけでもないが、そもそものサイズが大きすぎる。細い躰を
楔のように貫くそれがなかで擦れるたび、ぐちゅッ♡ぐちゅッ♡と湿った音が立ち、
ずっしりとした質量を味わわされる。

「おっほほ～、腰、ガックガク震えて可愛いねえ～？♡これはもう、完全に黒♡で
すな♡♡正直になるまで、ごっちゅん♡ごっちゅん♡下のお口尋問して、白状さ
せるしかないですなあ～～っ♡♡♡」

徐々にテンションの上がっていく男の口調にあわせ、彼のおちんぼもゲン♡と熱
量を増す。恐ろしいはずのその大きさを、待ちわびるように腰がわななくのを止
められない。

「お…♡あ……っ…♡」

小刻みに震える少年から、ずりゅう～～～っ♡と極太おちんぼがゆっくりゆ
っくり引き下がる。ジェットコースターの最初の上り坂に行くときのように、恐怖と
渴望に胸がつかえる。

今か？今か？？

と待ち構えるように、ヒクッ♡♡ヒクッ♡と淫らな汁のしたたるおマンコ内壁をうごめかせ、まだ男の先端の埋まった腰を、無意識にゆらめかせてしまう。

ぬぽんっ♡♡と。ねばついた汁をまとった極太おちんぼがついに抜き出され、

「あ” あ” !! ♡♡♡♡♡♡」

ごちゅん” ッ! ♡♡♡

と一気に奥へ突き入れられた。

待ちわびた刺激に肉洞が歓喜してさざめく。

びりびりと電流のような快感が打ちあがり、躰の内を燃やされる。

「お” ほっ…♡♡おお…ッ♡ッお” ッ♡♡、」

予告どおり、男は少年のなかを思い切り行き来しはじめた。

ぬらぬらとえっち汁にまみれた孔を行きつ戻りつ擦りあげられるのも、奥をごちゅ♡ごちゅ♡とノックするように突かれるのも気持ちがよく、少年の正気をいよいよ奪い去る。

「ほらほら♡腰、こんなに動いてるよお？♡ガクガク、ガクガクって♡こお～んなに大勢のオジサンたちの前で、恥ずかしいねえ～～？♡」

「ん？♡そっかそっかあ♡下のお口さんは、見られながらのほうが好きなんだねえ？♡」

怒涛の抜き挿しに、もうどっちからどの声が聞こえてくるのかわからない。

「はあ……♡はあ……っ♡こんなにきゅんつきゅん♡きゅんつきゅん♡締まって♡♡よっぽど恥ずかしいのが、大好きなんだねえ〜〜〜？♡♡」

「お” ッ♡♡お” ッ♡ちッ♡♡ちが…っ♡ちがううう……っ♡お” ッ♡♡おほっ…♡も…や” め…♡やめろ…よお…っ、♡♡お” ッ♡」

ぬりゅッ♡♡ごちゅッ♡ごちゅッ♡ぬりゅッ♡……

「違うのお〜〜？♡♡じゃ、抜いちゃおっかなあ〜？♡」

はげ
烈しい抜き挿しがピタリと止み、ひくひく♡ひくひく♡と切なげにうごめく肉洞を置き去りに、ぶっといおちんぼが入口のほうまで引き戻っていく。

反射的に、気づけば尻たぶが攣り²そうなほどきゅんッ♡♡きゅんッ♡♡♡と切なげになかを引き締めてしまう。

「おおっ♡さすが♡ダンサーの筋力^{きんりよく}はやっぱ違うねッ♡ふだんからおマンコ
括約筋^{かつやくきん}も鍛えてるのかなっ♡ヤバっ♡おマンコの筋力強すぎて…ッ♡オジサン
のおちんぽ抜けないよおっ♡♡」

「お” ほッ！？♡♡♡」

ゴムで繋いでいたものが引き戻すような速さで、入り口付近のおちんぽが少年の
最奥^{うが}を穿った。

ぞくぞくぞくう！♡♡

背筋^そが反り、貫かれた場所から脳天まで、まっすぐに雷が打ちあがる。

あ、と思った時にはもう遅く、張りつめた小さなおちんぽの先から失禁のように白
蜜が散った。

びゅるッ♡♡と快感のままに盛大に噴き出した先端に、店じゅうの男たちの視線
が注がれ、パンッ！という破裂音が店に響きわたる。音と同時に無数の銀のテ
ープが放射状にステージを覆い、キラキラとした紙吹雪^{かみふぶき}とともに少年にふりそそ
いだ。

この小さな舞台にはあまりに大げさだと思っていた銀打ち用の砲が、まさかこん
なタイミングで使われるだなんて。

少年が啞然としていると、

「これは……他の場所の筋肉も調べる必要ありますな！♡」

ハツとした口調で一人の男が言い、

「じゃ♡俺はここを～♡」

「わいはここにしよ～っ♡」

「あ” あッ♡♡ちよ…何……っや…っ、」

絶頂した余韻にびくびく♡している少年の乳首やおちんぽに、男たちの手が群むらがってきた。

「これも使っちゃお～～っ♡♡」

「ひッ！？♡♡」

突然みぞおちのあたりに冷たくヌルッ♡としたものが当てられ、少年は飛びあがる。

「な…っに…っ♡なに…これえ……っ、…っ♡♡」

ヌルヌルとしたそれは、少年の絹のような肌に吸いつきながらねっとりうごめと蠢蠢いて

いる。意思を持つその動きが生き物であることは、すぐにわかった。

「この店は魚介類も絶品だからね～。さっきその水槽から、タコごと買っちゃった～～♡」

(タコ——！？！！)

海沿いの地方都市であるここらの飲食店では、魚類の鮮度を保つために店先に調理の直前まで魚を生かしておく水槽がある店も珍しくない。
刺身などの料理も提供しているこの店も、例外ではなかった。

「ああああ…っ♡♡いやあ……！♡取って…っタコ取って…え…っ！、」

八本の細長いタコの触手が肌にへばりつき、無数の吸盤で吸いつかれる。
体勢的にタコがまったく見えないことが、いっそう^{きしょく}気色悪さを掻き立てた。
ヌルヌル這われた場所から、ざわりと全身に鳥肌が立つ。

「そうは言っても、おマンコ括約筋はきゅんっ♡きゅんっ♡て喜んでるよお？♡」

「あ” あっ♡♡」

奥深く繋がったまま腰を揺さぶられ、すでに弓なりぎみの体勢をさらに仰げ反らせる。

「乳首筋もビンッピンだし～～♡」

「おちんぽ筋も正直だねえ～～？♡♡」

「んおっ♡♡おお…っ♡さわ…らないで……え♡…お…っ♡♡」

男たちの指で、硬くなった乳首を転がされ、いったばかりのおちんぽをゆるゆるに扱かれる。

尿と白蜜とに濡れているのも構わず、むしろその湿り気やぬめりを愉しむように触れられるおちんぽは特にたまらなかった。

性感を煽られ、気持ち悪いと感じているはずのタコのヌルヌルすら、ぞくぞくとした甘い痺れになる。

それでもやはり馴染みのない生物が体表をうごめく気持ち悪さは拭えず、

「やだ…っ♡タコ……っタコ取ってえ……っ、♡」

涙ぐんで懇願するも、男たちが聞き入れる様子はない。

「そう言われましてもな♡我々、タコも含めて筋肉調査隊でありますからな♡」

「まあ、そうでありますな～♡ちゃあんと白状してくれたら、取ってあげてもいいかもですな～♡」

しこった右乳首をくに♡くに♡と押し倒されながら言われ、

「なあんでこんなにえっちなのかってこと♡教えてくれたら、タコさん取ってあげる～♡」

おちんぽを扱く力を少し強められつつそう言われる。

「ああ…っ♡♡あ…っえ…えっち……なんか、じゃ…♡あッ！♡だめえ…！……っ！、♡」

しまいには深く突き入れられていた男根すらもゆっくり狭路きょうろを行き来しはじめ、ぶるぶると躰が震えだす。

「お…っ♡おお……っ♡…っ、」

少年への尋問は再び幕を開ける。